

藤原宮第17-2・3次の調査

(藤原京朱雀大路)

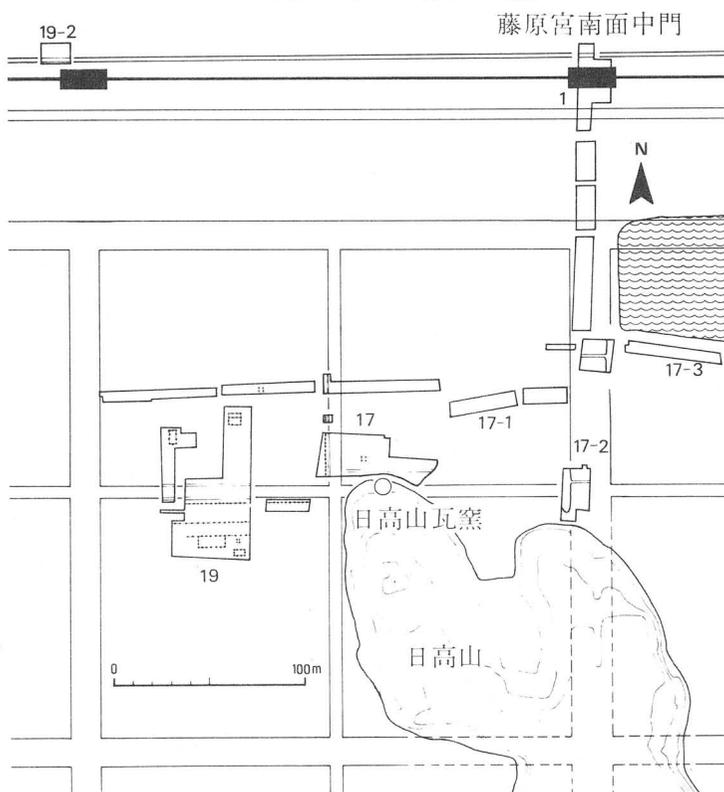
(昭和51年4月～昭和51年5月・昭和51年10月～昭和51年11月)

この調査は、藤原宮の南約200mに位置する日高山地区の橿原市市営住宅建設に伴う事前調査として実施したものである。今回の調査地の西に接する地域、すなわち藤原京右京7条1坊の一画は、既にその一部を藤原宮第17次調査として発掘しており、条坊に関連すると見られる塀・溝等を検出している「概報6」参照。さらに今年度は、藤原宮第19次調査として右京7条1坊の3坪と4坪を発掘し、7条条間小路と多数の掘立柱建物等を検出している(本概報収録)。

今回の調査地の藤原京における位置は、第1次調査で検出した南面中門の南150～200mにあたり、平城京の朱雀大路に相当する位置を占める。藤原京の場合も、この位置には以前から京の中央南北道路遺構の存在が想定されており、

また調査地の南半地区は、この中央南北道路と、東西に走る7条条間小路が交叉することが予想される位置にもあたる。調査は日高山北裾の南地区と、そこから北へ50m離れた北地区の2カ所で4月～5月まで実施し、その後10月～11月に北調査地区の東地区を調査した。

〔遺構〕 調査の結果、南地区と北地区で南北大溝と東西溝を検

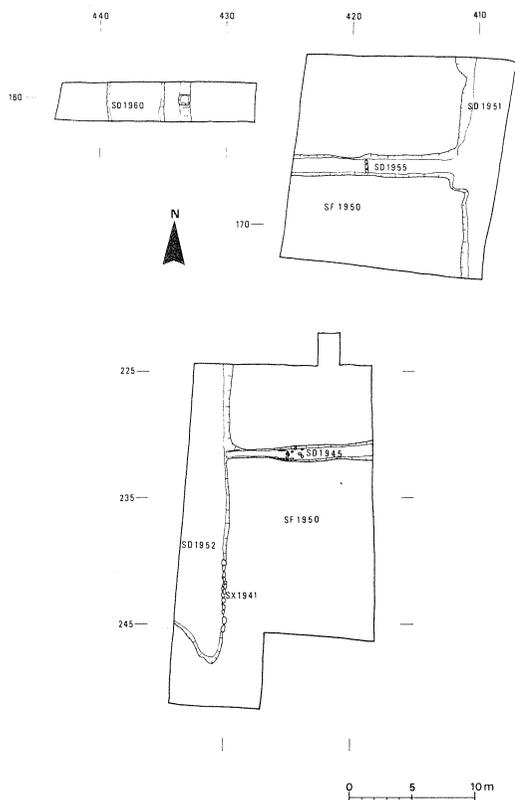


第17-2・3次調査周辺図(縮尺4000分の1)

出した。なお東地区では藤原宮期の遺構は検出されなかった。

南地区の南北大溝 SD1952 は幅 4 m 以上、深さ 0.4 m を測り、長さ 24 m を検出した。南端は日高山の北裾で終わっている。西岸は調査地外にあるため不明であるが、東岸は 0.3 m 大の玉石を積み護岸している。玉石積みは現状で 2 段あり、検出した溝の南端から北へ 6 m にわたって残っている。玉石積みは上端がそろっていないので、もとは 3 段以上積んでいたものと考えられる。溝の堆積土からは、7 世紀末から 8 世紀初頭にあたる藤原宮期の遺構から出土するものと同じ特徴をもつ土師器・須恵器および丸・平瓦の破片が少量出土した。この溝はその後、短期間に埋没しており、それ以降の遺物を含まない。

東西溝 SD1945 は、幅 1.4 m、深さ 0.6 m を測り、SD1952 の東岸から東へ 6 m の位置に玉石組の施設が残っている。この東西溝 SD1945 は、当初第 17 次調査で検出した東西溝 SD1845 の東延長部と考えられたが、藤原京の条坊との関連で考えると溝の東西の振れが大きくなりすぎ、同一の溝とするには問題が残る。



第 17-2・3 次調査遺構実測図

今後の検討が必要である。

北地区の南北大溝 SD1951 は素掘りの溝で西岸のみを検出した。幅 4 m 以上、深さ 0.4 m、長さ 18 m にわたって調査した。溝の堆積土からは SD1952 から出土したのと同じ特徴をもつ土師器・須恵器・瓦類が出土した。

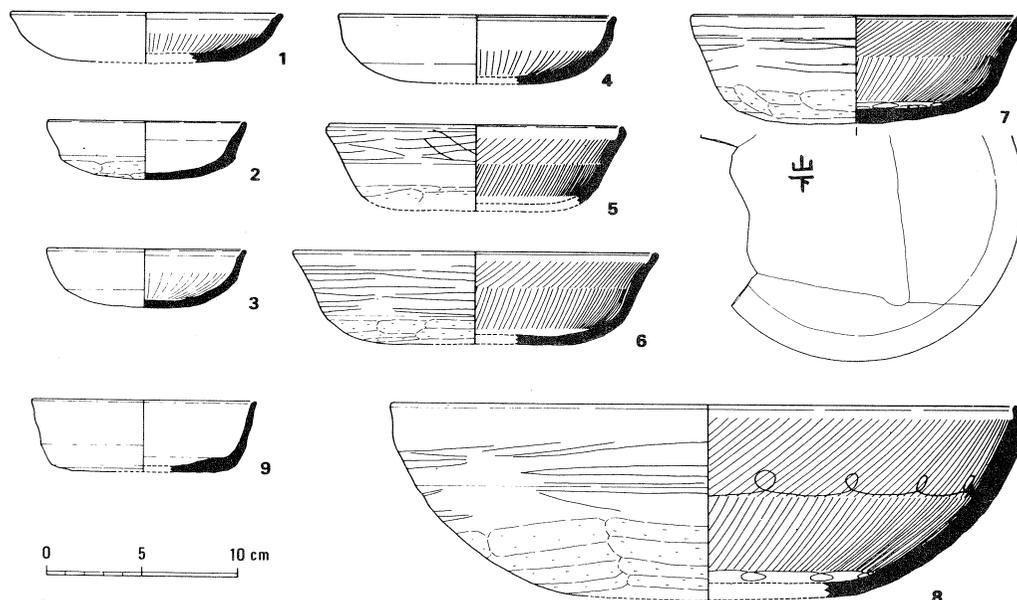
東西溝 SD1955 は幅 1.5 m、深さ 0.45 m を測り、長さ 13 m を検出した。この溝は SD1952 の西岸から西へ 7 m の位置に建築部材を転用加工した木堰を設けており、その木堰の東では木杭に小枝をからませたしがらみによる護岸施設がみられる。

なお、北地区の西10mにトレンチを設けた。このトレンチでは浅い素掘りの溝SD1960を検出した。SD1960はSD1952の延長と考えるには振れが大きくなりすぎ、異なる溝と考えられる。この西トレンチ一帯は後世の流路による削平が著しく、SD1952の延長にあたる溝は検出できなかった。

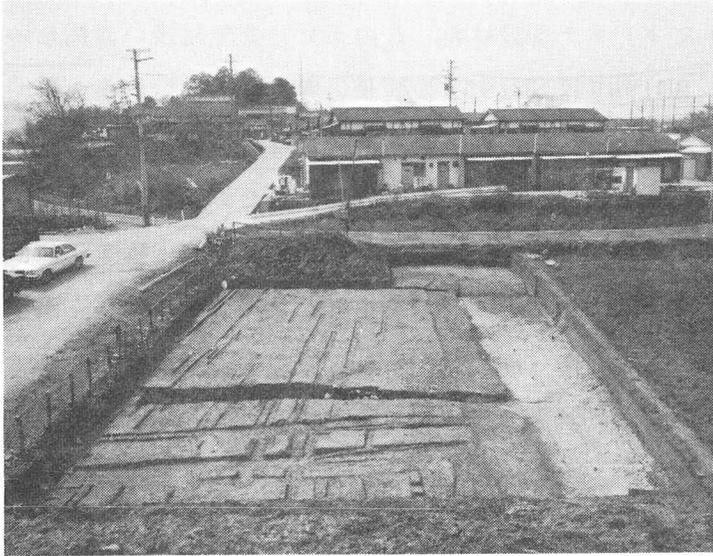
〔遺物〕 整理箱にして2箱程度の遺物が出土した。大部分が土器で、他に少量の瓦と木片がある。土器は土師器と須恵器を主とし、調査区全体から出土したが、南北大溝SD1951・1952からは比較的まとまったものが出土したので以下に図示する。(2)のみがSD1952、他はすべてSD1951からまとまって出土した。

土師器には杯A・CおよびHと盤があり、須恵器はいずれも小片で、図示できるものは杯A(9)のみである。また、底部外面の中央よりやや片寄って、「山下」と書いた墨書土器が1点ある。

〔まとめ〕 南地区の南北大溝SD1952と北地区のSD1951は、位置や出土遺物から同時期に平行して流れていたと考えられる。この平行する2本の南北大溝にはさまれた空白地は、藤原京の中央南北道路(以下平城京の朱雀大路にあたる)ところから、藤原京の朱雀大路と仮称する)に相当することから、この



第17-2・3次調査出土土器実測図 1・3~9; S D 1951, 2; S D 1952



南地区全景（北から）

2本の大溝は，朱雀大路の両側溝とみなされる。この朱雀大路の路面幅は約19m，両側溝の心々距離は東側溝の東岸が現在の道路下におよんでおり検出しえていないので明らかでないが，東西とも同規模のもので溝幅5mと想定すると約24mほど

に復原できる。この結果からみると，藤原京の朱雀大路幅員は第18次調査で検出した朱雀大路計画線と仮称した大路や，本薬師寺西南隅，すなわち8条大路と西3坊大路の幅員側溝心々距離16mよりも広く，宮南の中央大路としての性格の一端をうかがうことができる。

この側溝は，日高山の北裾に突きあたる位置で終わっている。これは日高山の山腹まで側溝がのびていたものが後世削平されて失われてしまったのか，朱雀大路の側溝を掘削した当初からこの位置で止まっていたのかは明らかでない。しかし西側溝東岸の玉石積みが，検出した溝の南端から北へ6mのみ遺存していたのは，日高山の山裾にあたる位置にのみ，とくに玉石による護岸を施していたことを想定させる。

なお東西溝 SD1945 に遺存していた石組施設は，この溝が暗渠となっていたことを示すものとみられ，東側溝 SD1951 と西側溝 SD1952 とを結んで排水するためのものであろう。SD1955 は溝の堆積層から出土した遺物からみると南北大溝 SD1951 よりやや古い時期のものとみられる。この溝は現在想定できる条坊とは無関係の位置にあるが，南北大溝 SD1951 に直交することから，この二つの溝がそれぞれ独立した溝とは考えにくい。なんらかの地割に関係した溝であった可能性が強い。